

ケニア東部における種子の入手方法と品種選択の変容に関する研究

平成 21 年度入学

参加したフィールドスクール：カメルーン・フィールドスクール

調査地（調査国）：ケニア共和国

吉川 久美子

キーワード：種子、品種選択、社会ネットワーク

自分の研究テーマについて

ケニアでは、労働人口の約 60%が農業に従事しているが、貧弱な農産物流通システムのもとでの急激な都市化により、食料輸入に依存する体質が加速化しており、農村にも急速に広がるグローバリゼーションの下で、種子や肥料の価格変動との関わりなしに農業を続けることが難しくなっている。本研究では、生産性向上のための品種改良とそこで開発された改良種子の導入によって一部の種子が商品化したことに着目し、農民による種子の入手方法と品種選択にどのような変容がみられるのかを明らかにする。

研究対象地域であるケニア東部に位置するキトゥイ (Kitui) 地域は、乾期には水不足と食糧不足が深刻な半乾燥地域である。そのため、多くの人々が植え付けの始まる雨季に種子不足に陥り、購入・贈与・交換など様々な種子入手ルートを利用して種子を確保している。農民の種子入手がどのような方法で行われているのか、社会ネットワークとの関連に注目して、種子入手ルートや品種選択の変容が地域の農業生産全体に与える影響について検討する。さらに、高い収量を謳った改良品種が、必ずしも農民に受け入れられない理由を考えるためにも、農民にとっての在来種の品種選択と品種維持の意義を考察したい。



マーケットで売られる穀物



ケニア東部伝統食の「ギゼリ」

フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクール参加期間中、演習の一環で訪れたキャッサバ畑では、在来種と共に改良種が実験的に栽培され、現地により根付きやすい改良品種の研究や、土地利用・生業活動とキャッサバ栽培の関係性、キャッサバの安定的な加工技術の向上など、多角的な調査が行われていた。自分の研究地域では見られないキャッサバの保存方法や調理方法を目にし、地域間の文化や嗜好の違いを知ることができた。また、政府機関・研究者・女性グループなどが積極的に連携してプロジェクトが進められており、プロジェクトが住民の生活に直接的に変化をもたらしている様子が伺えた。開発現場でしばしば問題となるマクロレベル・ミクロレベルにおける政策や視点のズレに着目し、現地の人々の行動原理に着目したミクロレベルの分析を通じて、両者を繋いでいくことの重要性を改めて考える貴重な機会となった。

フィールドスクールへの参加を通じて、自分の研究対象分野とは異なる分野の座学や演習に参加し、現地の研究者や他の参加者との交流から様々な視点と新たな発見を得たことも、貴重な知見となった。



キャッサバの改良品種



キャッサバ粉からちまきを作る実演

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

フィールドスクールに参加したことで、長期的なフィールドワークによって地域に密着した調査を行うことで、食糧概念や農法、食糧嗜好など、国際社会の認識とは大きく異なる地域独自の食糧構造を、実証的なデータを基に再検討することの意義を再確認した。フィールドスクールから学んだ知見を活かし、社会変容の著しい現代を生きるアフリカ農民の、農業に対する位置づけや食糧安全保障概念の変化を、現地に密着した調査を基に多角的に考察していきたい。現地農民による種子入手ルートと品種維持方法の変容を明らかにすることで、より地域に合った食糧不安状況の改善方法と持続可能な農業形態の発展について提言していきたいと考えている。また、アフリカ農業の主体性を回復させるための必要条件を見出すほか、土着の農業文化と開発技術などが対等な交換をできるようなより効果的な開発政策の手がかりも考えていきたい。